クラシック鑑賞記～コンサートホールへ行こう！

―◆―演奏会情報―◆―

2012.10.12（金）　日本センチュリー交響楽団第175回定期演奏会

（会　場）　大阪　ザ・シンフォニーホール

（曲　目）　［1］A・ドボルザーク　序曲「謝肉祭」
［2］P・チャイコフスキー　ロココ風の主題による変奏曲　※
［3］D・ショスタコーヴィチ　交響曲第10番

（指　揮）　小泉　和裕

（管弦楽）　日本センチュリー交響楽団

※（チェロ）　ニコラ・アルトシュテット

―◆―鑑賞記―◆―

［1］A・ドボルザーク　序曲「謝肉祭」

良く取り上げられるドボルザークの序曲の一つ。
だからこそ難しさもある。多少の乱れはあったが、気迫十分の演奏だった。フィナーレの盛り上げ方、テンポ感は、「さすが小泉氏！」と言いたい。

［2］P・チャイコフスキー　ロココ風の主題による変奏曲

続いて演奏されたチャイコフスキーの作品も、まずまずの演奏だった。
チェリストのニコラ・アルトシュテット氏は、ドイツ出身の若手ホープの一人だ。実は、彼の演奏は、先に赤穂で開催された赤穂国際音楽祭「ル・ポン2012」で聴いていたのだ。その時とは、どことなく違う印象を受けたのは、ホールのせいだけではないように思う。
もちろんこの変奏曲もアンサンブルと言えばアンサンブルだが、やはり「ソリストとしての腕前を存分に発揮した」という点が大きく異なっていたのかもしれない。とても温かみのある音色で、チャイコフスキーらしさが端々まで表現されていて、うっとりと聴き惚れてしまった。
途中やや不満な部分はあったが、全体として良くまとめあげていたように思う。小泉氏のオーケストラ統制力もその裏にあったことは否めない。

［3］D・ショスタコーヴィチ　交響曲第 10 番

本日のメインディッシュ。ショスタコーヴィチの交響曲第 10 番。

総じて素晴らしい演奏だったが、今ひとつ何か物足りなさのようなものを感じたのは、わたしだけではないのではないだろうか。

第 1 楽章のモデラートは、まさにロシア的な響きを全面に伝える曲調となっていた。どことなく響きに深みがなかったか。第 2 楽章は、激しく勢い良く、何か荒々しさを表現した曲だったが、ここでもややまとまりに欠けていたように思う。第 3 楽章のワルツは、難しい。ただ、そこそこにうまくオケもなっていた。そして、第 4 楽章アンダンテ。これは、良かったが、どうも中だるみ。金管と弦がうまくかみ合っていない印象を受けた。どうしたセンチュリー響！

わたし自身、ショスタコーヴィチと向き合う準備が出来ていなかった（心に余裕がなかった）という気はするが、ストンと心に響いてくる演奏という感じではなかった。小泉氏の演奏を聴くと、いつも「すごい！」という高ぶりを感じるのだが、今日に限ってそれがなかった。

また次の演奏会を楽しみに待つことにしたい。